

一八八三年十二月十六日(日)

ドツキネシヨル
南神寺院において——ラカール、ラトウ、ジャナイのムケルジーたちと共に

タクール、聖ラーマクリシュナは、西側の半円形ベランダでモニといつしよに坐っていらつしやる。すぐ目の前は南へ向けて流れる聖なるガンガー。周囲一面にくちなし、ジャスミン、夾竹桃きょうちくとう、ばら、クリシュナの冠チユラなど、さまざまの花々が咲きみだれている。時間は午前十時頃だろ。

今日は日曜、オグロハヨン黒分二日目。キリスト暦一八八三年十二月十六日。タクールはモニの方を見ながら歌を口ずさんでいらつしやる——

救いたまえ わがおおみは大実母

籠の鳥のごときわれらを

解き放ちてしかも護りたまえ

数知れぬ罪科あやまちに破れ傷つき

仔を見失いし母牛のごとく

無明のなかをあてどなくさまよう

〔ラーマを慕うシーターのような情熱〕

聖ラーマクリシュナ「どうして？ 籠の鳥のように生きるなんて、どうしてだ？ みつともない！

チエツ！」

こうおっしゃる間に前三昧になられて——体も心も静まりかえり、目から涙を流して！ しばらくして、次のように話された。「大実母^マ、シーターのようにしておくれ！ 全く何もかも忘れて——肉^{からだ}体も忘れて、性器も手も足も乳房も忘れて——どこにも気をとめずに、ただ一つのことだけ考えている——ラーマはどこに——」

こんな状態にまで夢中になれば、神をつかむことができる——モニにこれを教えるためにタクールは、シーターのことをおっしゃったのだらうか？ シーターの生涯は、ただラーマへの思慕で貫かれていた。ラーマを想って狂女のように——ふつうなら自分にとって最も大切であるべき肉体をさええ忘れ果てていたのだ！

午後四時ころ、タクール、聖ラーマクリシュナは信者たちと共に例の部屋に坐っていらつしやる。ジャンイのムケルジーさんともう一人が、部屋に入ってきた。彼はブランクリシュナ氏の一族である。彼と共に来たのは聖典・経文に詳しいバラモンの友人である。モニ、ラカール、ラトウ、ハリシュ、ヨー

ギン(後のスワミ・ヨーガーナンダ)たちが部屋にいる。

ヨーギンは南神村トホキョウムのサヴァラナ・チヨドリチヨドリの息子である。彼は近ごろ、殆ど毎日のように夕方近くになるとタクルの許もとを訪れ、夜には帰っていくのであった。ヨーギンはまだ結婚していない。

ムケルジーはご挨拶フナナムをしておっしゃった——「あなた様にお目にかかつて、本当に嬉しうございませす」

聖ラーマクリシユナ「あの御方は、すべてのなかに宿っていらつしやる。すべての人にあの黄金があるが、ある場所にはとてもよく現れている。世間では、その金が厚い泥土ドロに埋まつている」

ムケルジー「はつはつはつは。先生、この世とあの世はずいぶん離れているのでございませうか？」
聖ラーマクリシユナ「修行中は、これではない、これでもない」と打ち消して捨てていかなげりやならぬ。あの御方をつかんだ後は、あの御方がすべてのものになつていらつしやることがわかる。

ラーマ王子が世を捨てようとした時、父王ダシャラタは心配して賢者ヴァシシュタに、ラーマが世を捨てることを思いとどまらせるよう頼んだ。ヴァシシュタがラーマのところへ行つて会つてみると、彼は世を捨てたいという気持ちで胸ふさがれ、沈みきつた様子で坐つていた。ヴァシシュタはこう言った——『ラーマよ、君はなぜ、この世を捨てようとするのかね？ この世は神の外にもあると思つているのかね？ さあ、私といつしよによく考えてみようじゃないか』——ラーマはこのとき、この世はかの至高梵パラブラフマンから生じていることを覺さとつて、黙つたままだつた。

バターミルクはバターと同じものから出来ている。バターミルクのあるところにバターがあり、バ

ターのあるところにバターミルクがある。大変な苦勞してバターをつくってみると（即ち、ブラフマン智を得ると）、さて、バターのあるところにはバターミルクもあるんだ、という事実がわかる。ブラフマンがあると感じている間は、人間や動物、この世界、二十四の存在原理もみんなあるんだよ」

〔ブラフマン智に到るたった一つの方法〕

「ブラフマンの本体はどんなものか口では言えない。あれ以外の何もかも、食いカスになってしまったが（即ち、口で語られたので）、ブラフマンはどんなものか誰も説明できた人はいない。だから食いカスになっていない。この話をヴィディヤサーガルにしたら、ヴィディヤサーガルは大そう喜んで聞いていた。

世俗の心がほんの少しでも残っていれば、このブラフマンは覚れない。女と金から、心がすっかり解放されたら覚れるよ。ヒマラヤ王にパールヴァティーはこう言った。——『ババ（お父さん）、ブラフマンが覚りたかったら、聖者たちと交際なさいな』」

タクルルは、^ゞ社会人でも、出家でも、女と金に関心がある間は、決してブラフマン智を得ることはできない^ゞとおっしゃったのだろうか？

〔ヨーガからの離脱——ブラフマン智を得た後の世間での生活〕

聖ラーマクリシュナは、またムケルジーの方を見ながらおっしゃる——

「あなた方は財産も地位もあるのに神を求めているが、これは大変いいことだよ。ギターにあるが、ヨーガの修行をしていて途中で外れた人は、豊かな家に、神の信者として生まれかわる」と

ムケルジー「友人に向かつてはっはっはっは。——シユチーナーン、シユリーマタン、ゲーヘー、ヨーガ・ブラシュトービジャーヤター(サンスクリット)『挫折したヨーギーは次生において、地上の徳高き豊かな貴族の家庭に生まれる』(訳註——バガヴァッド・ギーター6・41)

聖ラーマクリシユナ「あの御方はその気になれば、智者を世間に置いておくこともお出来になる。あの御方の意志で生き物と世界ができているんだから——。あの御方は、したいことをなさるんだから——」

ムケルジー「はっはっはっは。あの御方が今さら、何をしたいとお思になるでしょうか？あの御方に、何か不足のことでもあるのですか？」

聖ラーマクリシユナ「アッハッハッハ。したいことがあつたつて構わんだろう？ 水は静止していても水だし、波立っていても水だよ」

〔生き物と世界は虚妄か？〕

「蛇は黙ってトグロを巻いていても蛇だし、こつちを向いたり、あつちを向いたりしてニヨロニヨロ動いていても蛇だよ。

旦那が黙って坐っていても、何か仕事をしていても同じ人だよ。

世界から生き物をどうして取り除けることができる？ そんなことをしたら、全体の目方が減ってしまう。ベルの実から種と殻を取りのぞいたら、ベルの実の重量は測れなくなる。

ブラフマンは触れることができない。空気のなかにいい香りやいやな臭いがただよっていても、空気がそれと無関係だ。ブラフマンとシャクティは不異だ。あのアディヤシャクティが、生き物とこの世界に成っているんだよ」

〔三昧ヨーガの方法——泣くこと——信仰のヨーガと瞑想のヨーガ〕

ムケルジー「どうしてヨーガの道をふみ外すのでしょうか！」

聖ラーマクリシュナ「母の子宮にいたときはヨーガの状態だったのに、地上に生まれ落ちて土を食った。産婆は臍の緒を切ってくれたが、さて、マヤーのひもはどうやって切ろうか。

女と金がマヤーだよ。自分の心からこの二つがなくなればヨーガ（神との合一）だ。真我、つまり、至上我は磁石で、個人我（小我）は針だ。あの御方（至上我）が引きつけるとヨーガになる。だが、針が泥にまみれていると磁石に引かれない。泥を拭きとると引きつけられる。女と金という泥を、キレイに掃除しなけりやならないよ」

ムケルジー「どのようにして掃除したらよろしいのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方に恋い焦がれて泣け——その涙が泥をサラサラと洗いおとす。すっかりキレイになったら磁石に引かれるよ。そうしてヨーガは成功するんだ」

ムケルジー「あー、何という素晴らしいお言葉！」

聖ラーマクリシュナ「あの御方のために泣くことができたなら、会えるよ。——三昧に入れる。ヨーガが成熟したら三昧だ。神を求めて泣くことでクムバカは自然にできる。それから三昧だ。(訳註、クムバカ——呼吸の抑止、ブラーナーヤマ(呼吸法)の一過程)

それからもう一つ、瞑想デイヤーナという方法がある。サハスラーラ(頭の頂・大脳にあるチャクラ——千弁の蓮)にはシヴァ大神が特別な相すがたで在す。その御方を瞑想するんだ。肉体は容れ物、心と知性は水だ。この水に、あのサッチダーナンダの太陽が映っている。その映っている太陽を瞑想しつづけると、あの御方のお恵みによって真実の太陽を見ることができなのだ」

〔聖者や修行者と交わること。神に全権を委任すること〕

「だが一般の人は、いつも聖者や靈格者のもとに出入りしていることが大切だよ。それはあらゆる人にとって必要なことなんだよ。出家サンニヤレンにとっても必要なことだ。だが、一般の人には特に大切なことだ。年中、女と金のなかで暮らして、病気にかかっているんだから——」

ムケルジー「仰せの通り、ほんとに病気にかかっております」

聖ラーマクリシュナ「あの御方に全権を委任しろ。そうすれば、あの御方が何でもして下さる。あなたは猫の仔のように、ただあの御方を呼んでいればいいんだよ——一生懸命にね。母猫がどこに運んで置こうと仔猫は何も知らない。寝台ベッドの上に置かれることもあるし、台所のすみに置かれるときも

あるし——」

〔初心者には書物も必要——修行——見神〕

ムケルジー「ギターなどの経典を読むのはいいことですね」

聖ラーマクリシュナ「ただ読んだり聴いたりしただけじゃ、何にもならんだろう？ 牛乳のことに
ついて聞いた人がいる。牛乳を見た人がいる。それから、牛乳を飲んだ人がいる。神様は見られるん
だよ。その上、いっしょに話ができるんだよ。」

最初は初心者だ——この人は読んだり聴いたりする。その次が修行者——あの御方を呼ぶ、瞑想を
する、考える、称名する、讚神歌をつたう。その次が成就者^{シッダ}で——あの御方を直^{じか}に感じたり見たりする。
それから完全成就者^{シッダ}——これはチャイタニヤ^{デーヴ}様のような境涯だ。時にはヴァアツツア^{リヤ}の(神を自分の
子供と見る親のような)態度で、時にはマドウラ(愛人)のような態度で」

モニ(校長)、ラカール、ヨーギン、ラトゥウ等信者たちは、この神々も及ばぬほどの世にも稀な真理の
言葉を聞いて驚いている。

ムケルジーたちがおいとまする時間になった。彼と友人はタクルを拜してから立ち上がった。タ
クルも見送っていいねいに立ち上がられた。

ムケルジー「ははははは、あなた様がお立ちにならないでも——」

聖ラーマクリシュナ「アツハツハツハ、立つても別に損はないだろう？ ジツとしていても水、よ

りかかってもプラ下がつても水。落ち残った木の葉は風の吹く方へ舞っていく。わたしは道具で、あの御方が使い手だ」

聖ラーマクリシュナの見神とヴェーダーンダについての秘密の説明——不二元論派と制限不二論派——世界は虚構か？ 不可分のものと同分のものと同じ

Identity of the Undifferentiated and Differentiated

ジャンイのムケルジーたちは立ち去った。モニは考えている——ヴェーダーンタの意見では、すべては幻影だ、という。それなら、動物も人間もこの世界も、この私というものも虚構なのだろうか？ モニは少々ヴェーダーンタを勉強してきた。また、ヴェーダーンタのほんやりとしたこだまであるカントやヘーゲルなど、ドイツの哲学者の著書も読んでいる。けれども、タクール、聖ラーマクリシュナは、未熟な人間たちのような考え方をなさらないのだ。宇宙の大実母である御方からすべて、直接に教えをうけてこられたのだ。^(原典註)——モニはこんなことを考えていたのである。

しばらくの後、タクール、聖ラーマクリシュナとモニは、二人きりで西のペランダに出て話をしていく。正面にガンジス河が滔々として南へ流れている。寒い季節で——お日様はまだ沈まず空の南西の隅に静かにかかっている。ヴェーダのなかにあるような生涯を送っている御方——この御方の聖なる口からほとばしり出る言葉は、ヴェーダーンタ(無上の智慧)の言葉である。この御方の聖なる口を通して、至聖の神がお話しになるのだ。この御方の不滅の言葉は、ヴェーダ、ヴェーダーンタ、バガヴァタの内容を網羅していて、まさに、あの果てなき恵みの海そのものが、人間の形をとった導師

として話をしておられるのだ。

モニ「この世界は虚構^{うそ}なのでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「世界がどうしてウソなんだい？ そりやみんな分別^{ウイチョウ}（頭の中）での話だよ。

はじめのうち、ネーティ、ネーティ（これではない、これでもない）と分別判断^{シブツ}している時期は、あの御方は生き物ではない、世界ではない、二十四の存在原理でもない、ということになって、こんなものは皆、マボロシだということになる。そのあとでひっくりかえる。そして、あの御方こそが、生き物やこの世界になっていらっしやるとわかるんだよ。

お前、階段をのぼって屋根に上がるだろう。屋根があると思っっている間は階段もあるんだよ。上があると思ってる人には、下もあるんだよ。

それに、いざ屋根に上がってみると、屋根をつくっている材料の品、つまり煉瓦、石灰、セメントなんか——それと同じ材料で階段も出来ているんだということがわかる。

ベルの実の話も、以前^{まえ}にしただろう。

ヨロメかない、という人にとっては、ヨロメくこともあるわけだ。

私^シという感じは無くならないよ。この私^シの頭^{カミ}があるうちは、生き物も世界もちゃんとあるんだ。あの御方をつかんだら、あの御方自身が生き物と世界になっていらっしやるのがよくわかる——た

（原典註） Revelation : Transcendental Perception : God-vision. (啓示、超自然的な認知、見神)

だ考えるだけじゃわからないがね。

シヴァ(神)に二つの境地がある。三昧に入つて、大ヨーガの座に坐つていなさるときは、このときはアートマ・ラーマ(至高の喜び)に没入している。も一つ、その境地から下りてきて、ほんのちよつとワタシがあるときは、ラーマ、ラーマと言つて踊つていなさる」

タクールはシヴァの境地を説明なさりながら、ご自分の境地をそれとなくおっしゃっているのではないだろうか？

夕方になつた。タクールは宇宙の大実母の名を念じ、想つていらつしやる。信者たちもそれぞれ静かな処へ行つて瞑想にふけていた。一方、神殿においては、大実母カーリーのお堂、ラーダーカーンタ堂、および十二のシヴァ堂で献灯が始まつていた。

今日は黒分二日目だ。夕方になつて間もなく月が昇つた。その光が、寺院の建物や四方の木立ちや聖なる流れとその堤の灌木の茂みにふり注ぎ、えも言われぬ美しさである。この時に、なつかしいあの部屋で、タクール、聖ラーマクリシュナは坐つていらつしやるのだ。モニは床に坐り、夕方していたヴェーダーンタに関する話のつづきをはじめた。タクールは再び説明してくださいさる。

〔すべてが霊であることを見る——マトウールに管理人が報告したこと〕

聖ラーマクリシュナ「(モニに向かつて)世界が虚構や錯覚であるワケがないだろうか？ あれはみんな討論の上での話だ。あの御方を見たら、生物や世界になっているのはあの御方以外にない、とい

うことがわかる。

カーリー堂で大実母がわたしに見せてくださったよ。大実母みずからが、すべてのものになつていなさるってことをね。ありとあらゆるものがチンモイ靈(意識)なんだよ！ 神像も靈！ 祭壇も靈！ 祭具のコトシヤイさじも靈！ 敷石も靈！ 大理石の廊下も靈！ 何もかも靈なんだよ！

部屋の中を見たら——何もかも甘露(ラーサ)に浸っているんだ！ サッチダーナンダの甘露だ。

カーリー堂の前に悪い奴が一人いるのを見た。でも、その人の中にもあの御方の力がガラガラしているのが見えたよ！

そういうわけなもので、お供えのルチ(揚げパン)を猫に食べさせていた。だって、猫も大実母がなつていなさるんだもの——。そしたら、寺の管理人がシエジヨさんに手紙を書いて、『バッチャルジ・マハーシャイ(訳註)(タクル)が、お供えのルチを猫に食べさせておられます』と告げ口した。シエジヨさんはわたしの境地をよく知っているからね。『あの方が何をしようと、何も言つてはいけない』と書いてよこした。

あの御方をつかむと、こういうことがハッキリ見えるんだよ。あの御方が生き物、世界、二十四の

(訳註)バッチャルジ・マハーシャイ——アジヤ祭祀を執り行う神職を指す言葉で、ここではタクルのこと。ドッキネーシヨル寺院では人物を名前で呼ぶことは少なく、その役職で呼ぶことが多かった。タクルの兄ラームクマルの在命時には、兄と区別する為に、チョット(若い)・バッチャルジ・マハーシャイと呼ばれていた。

存在原理になつていなさることがね。

けれども、もしあの御方が、私をすっかりキレイに拭きとつてくださった時はどうなるか、それは口では説明できない。ラームブラサードが言っているように――

そのときは

あなたと言えばいいのか

わたしと言えばいいのか

それはあなたにしか分からない

こんな境地に、わたしはときどきなるんだよ。

頭で分別しているときは、或る一つの見方をする。そして、あの御方が見せてくださるときは、また別の方法で見るんだよ」